

「賀古駅家、発掘ものがたり」 22 <地元史のすすめ>



<現地説明会の様子>

発掘調査というきっかけで、野口町とかかわることができました。そのおかげで、改めて地域史（さらに小さな地元史）の大切さ、おもしろさに出会うことができました。発掘調査は長い間現地に留まるので、ちょっと通りすぎただけでは見逃してしまうようなことでも丁寧に拾い集めることができます。

古大内の墓地内には東播磨全体に分布する古墳時代の石棺が置かれていました。石棺好きの私にとって資料が一つ増えました。

また、賀古駅家の場所には第二次世界大戦中、軍隊の宿舎があり、そこに居た青年たちが尾上の飛行場を経て特攻隊へと飛び立っていった、というお話もうかがいました。今も、その頃に使われていた井戸があり、改めて身近に大きな歴史の残像が刻まれていることを知りました。百聞は一見にしかず。言葉よりも実物、痕跡は私たちに訴えかける大きな力をもっています。そう、今回発見された唐居敷のように。

残らないもの、残せないものも多くあると思いますが、残したいもの、残すべきものを、地元愛の力で形になっていけば素晴らしいことだと思います。

知っているからといって、何か役にすぐに役にたつとは限りません。でも、どうせなら知らないより知っている方が人生おもしろいでしょう。これからは地元愛が地域を、人生を豊かにしてくれるものと信じています。地元愛を育むためには、地元のいろんなことを知ることが第一歩だと思います。どんな些細なことでもかまいません。

普段から当たり前のように存在している石、道、道具・・・すべては時代の流れの必然性があるところにあるのです。そんな当たり前の意義を再発見してみましょう。きっと素敵な地元が見えてくるに違いありません。

今回の調査が地元愛を育むきっかけとなれば、調査担当者としてこんなうれしいこと

はありません。

長期間にわたり、最後まで駄文を読んでいただき、ありがとうございました。

(完)

兵庫県立考古博物館 学芸員 中村 弘